



図15 玄界基地 夜間雷撃隊搭乗員

六三四空は、制空権を全く失った戦況の中で決号作戦に備えた。瑞雲隊は、急降下爆撃訓練、ロケット砲の発射訓練をして備えた。零式水偵の雷撃隊は、機体改修、各レベルの雷撃訓練、哨戒索敵、要務飛行と慌ただしい任務の中で決戦に備えた。

呉、舞鶴、大村の各工廠で改修中の飛行機があり、改修完了を待った。搭乗員や兵員の集結は、空路飛行機および陸路汽車やトラックであった。七月から八月にかけては、各工廠への飛行機の改修、引き取り、集結、呉基地への実射訓練と慌ただしい往來の中に、幾組もの搭乗員や整備員の姿があった。

ここに、九五一空から六三四空に転入した、元雷撃隊搭乗員で海軍中尉の伊藤祐信氏（神奈川県厚木市）の飛行機引き取りの回想を引用する。

訓練終了後、呉工廠への出張は自分の乗る飛行機の受領である。八月六日に原爆投下された広島駅へ着いたのが九日の午前中であった。呉への列車乗り替えに一時間程の時間があり、つぶさにこの眼でその惨状を見聞した。九日から待つこと一週間ようやく出来上がったのが十五日午前中であり、夕方までに玄界基地へ帰る準備をしておいたら、ラジ

オ放送を聞くようにとの事で、一応聞いたが、よくわからなかった。夕方基地へ降りたつとたんに戦争が終ったことを聞かされた。その直後米機動部隊の本土接近を警戒して飛行機を整備し魚雷を搭載していつでも出撃出来る態勢で居るよう指示を受け複雑な気持であった。八月二十日夕刻総員集合があり、搭乗員は危険だから解散する、明二十一日午前五時整列、九州の者は汽車で、その他の者はもよりも乗り合って飛行機で自宅に帰ることが申し渡された（筆者の依頼に応じての二〇〇三年七月一日付の書簡）。かくして終戦となり、玄界基地は六三四空終焉の地となった。

水上飛行機の最大の秘匿基地は、なぜこの地に開設されたのであるうか、適地の条件を探る。一つは、飛行機の離着水の安全上から風と波の影響を受けにくい水面がある。二つは、飛行機の接岸給油および陸揚げ作業上、干潮時に干潟にならない砂浜がある。三つは、飛行機の隠蔽格納の必要性から浜辺近くに松林や小高い山すそがある。四つは、民家を宿舎や施設に使用するため部隊を収容できる規模の集落がある。五つは、輸送確保の必要から鉄道の駅からあまり遠くないなどである。糸島半島南西海岸の船越湾、引津湾一帯は、この条件を満たしていたことになる。

玄界基地は、基地開設から約六ヶ月で終戦を迎えた。部隊の解散、撤収は整然とおこなわれたようである。終戦に伴う残務整理はどのようにおこなわれたのであろうか。元飛行機整備の士官で大湊の九〇三空から六三四空に転入し、残務整理に一部

かかわった元海軍中尉高松工氏の談があり、要約すると次のごとくである。

六三四空の書類関係は無いのではないか。理由は、第一次六三四空というのがフィリピンで実に荒唐なんです。色々な事があった。第二次もフィリピンで随分あった。艦上攻撃部隊というのは、正直いまして気が荒い。ものすごい訓練しますから。六の字が付いたら六三四、艦攻です。二の字が付いたら二〇一とか戦闘機部隊です。八が付いたら水

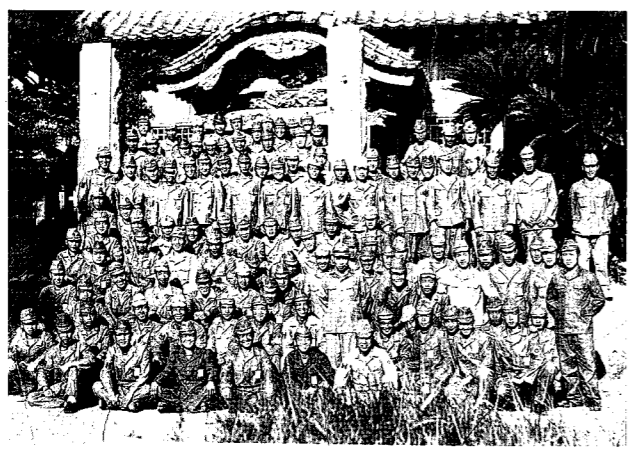


図16 玄界基地 兵器部隊（綿積神社境内 昭和20年8月15日）

偵・飛行艇です。九が付いたら零水などの偵察です。私がそこで聞いたのは、司令だったか分からんが、第一次、第二次がひどかったので、第三次はたっぷり報復受けるだろう、戦争が終わったら、仕返し受けるに違いない、第三次は今編成中なので編成しないことにして、転入部隊の書類は、全部原隊に返し原隊で処理させることになった。とにかく皆第三次の六三四空は無いことにし、書類は焼却するという話だった。そのような理由から書類焼いとるから海軍部内にも詳しい書類は無かったのでは（氏は回天記念館元館長・周南市大津島養浩館にて二〇〇六年二月二日談）。

この本部書類を焼却処分した当事者の一人は、前記の元実務練習生の加藤衛氏である。その焼却状況の回想を引用する。終戦により武装解除、多くの隊員が復員していく中、本部にいた従兵のうち数名は本部所管の文書綴・書類・図書・写真の原版などを焼却するよう命令を受けた。すべてが機密扱いのものであったか否かは不明なるも、夥しい量であり、炎天下本部前の広場で長い丸太棒を使ってこの作業は、滝のように汗が流れた。簿冊や図書類はそのまゝでは燃えにくく、数枚ずつはがして焼却した。終戦の翌日（十六日）午後より、十七日午前中までかかったように記憶している（筆者の依頼に応じての二〇〇三年八月二〇日付の書簡）。

六三四空とは……、玄界基地とは……。そして、瑞雲機の生産全機を指揮下に置き、終戦時の残存全機が六三四空にのみ配備されていたこと。海軍航空隊初の零式水偵による雷撃隊編成

※第四章・第二節・二 志摩町の軍事施設（抜粋）

近代編 全260頁

近代は、明治維新から第二次世界大戦の終結まで、激動の時代について掲載しています。明治初年の福岡県は激動の渦中にあり、民衆の生活も大きく影響を受けました。雨乞いをめぐるいざござが筑前竹槍一揆に発展し、県内各地で打ちこわしが発生しました。明治22年に市制、町村制が実施され、志摩町域に野北・桜井・可也・小富士・芥屋の五カ村が成立しました。明治から大正にかけて、現在の糸島地区の教育機関の前身が設立されています。また、海外へ、生活の糧を求めて志摩町域からも沢山の人が海を渡りました。日中戦争の勃発とともに戦時体制に移行し、馬場の六所神社、小富士小学校など各所で武運長久祈願祭がおこなわれています。昭和16年に寺山補給廠（小倉陸軍兵器補給廠小富士集積所）が開設され、昭和19年には小富士海軍航空隊、昭和20年には玄界基地などが設置されました。当時の資料をもとに、今なお残る史跡や当時の様子を紹介します。



近代編 執筆者紹介

- 石瀧 豊美 (福岡地方史研究会会長)
入江 幸生 (郷土史家)
永長 道生 (郷土史家)
黒木 彬文 (福岡大学非常勤講師)
鳥巢 京一 (福岡市博物館学芸員)
中田 健吉 (志摩町議会議員)
矢野健太郎 (元志摩町史編さん室嘱託員)
山田 良介 (久留米大学非常勤講師)